

令和五年二月二日(木)

兼題『霜』&『雪』、席題『節』(せつ、ふし)

節分前日に見学者(福本多佳子、浅野郁子両氏)を迎えて句会を、日本倶楽部にて開催。

松田 一文字

雪つもり落ちては撥ぬる竹の音  
朝陽射し銀砂きらめく霜の畑  
梅林の見ごろ尋ねて漱石忌  
節分や鬼の面買ふ父若し  
筑波井の水跳ね散らし寒雀

首藤 しずを

日脚伸び身重の母と幼児に  
路地裏をさまよふ猫や霜の夜  
喜びもこの中にこそ雪籠  
鷹ひとつ空の蒼さを突き破り  
踏み当てし節分の豆ここかしこ

宮原 凧

樹々の間の風の音聞く冬の真夜  
淡雪の肩先を舞ふ夕まぐれ  
ランドセル弾ませ歩く霜柱  
冬ざれや名簿の削除また一つ  
節ぶしの笑ひ出す風呂寒の夜

森田 元斐

驚愕の海外ニュー入霜の声  
折節の大事小事や春の朝  
幼子に余る大凧大空へ  
裂帛の母の気合や羽子日和  
新調の鈴の緒踊る初詣

大津 そうかい

飛石を深く沈めし今朝の霜  
虚空より天女の調べ寒夕焼  
喘ぎ来し峠真つ向雪の富士  
山眠る遥かな富士の懐に  
寒梅や節に殉じし会津藩

高橋 由紀子

霜の芝甘える犬を抱きて踏む  
どんど焼き高し数多の児の瞳  
雲の端きらら冬日ゆくりと昇り来ぬ  
節分やよくも生きたり豆の数  
黒土と薄雪の間の草の芽よ

中村 晃也

山ひとつ越えて丈余の雪の里  
船頭の雪見小唄の節回し  
夜の帳音なく降りて霜の声  
雪折れや風に逆らう竹の節  
雪ウサギ消ゆ赤い実を二ヶ遺し

新田 ゆふき

霜原に鼻先光る朝の犬  
めっちゃやめちや霜柱踏まる通学路  
長唄の小節きかせて春の演  
夕刊のこそりと届く雪催い  
茅原を守るとふ旗寒の空

志村 良知

蕎麦を掻く鯉節出汁香り立ち  
丹沢に雪見る朝の空広し  
更地泥濘白き山茶花残さるる  
酔漢も声潜め行く霜夜かな  
一輪を指差し合ひて冬の梅

長尾 進一郎

薄ごほり魚の潜める池の底  
霜柱踏めば応へる朝の道  
お隣の分を雪掻き節痛む  
日脚伸び出番何ふ草も木も  
マフラーを三重に巻き氷点下

浜口 須美子

七色に光る春日野霜の朝  
子が父に激しく豆撒く節分会  
水割りに雪玉有線のビートルズ  
木っ端みじんガラスきらめく霜の朝  
鹿の背に霜光る朝浮見堂

安藤 晃二

節を折りし遠き日々あり冬木立  
朝霜や苔生す庭に白を引く  
待ち侘びし蠟梅の黄や去り難し  
紅梅の里に輝き野山寂ぶ  
見上げたる頬打つ雪の黒ずみて

内藤 まりこ

枯れ薄おいでおいでと風を呼ぶ  
キンと冷ゆはるか遠くに山眠り  
節操の小さな声よ鬼やらい  
踏み込めば氷のクッション霜柱  
異常気象止まった列車の雪景色

西川 知世

寒鴉夕陽へ嘴を固く閉ぢ  
喉飴に肉桂の匂ひ日向ぼこ  
飴切の音に囀され節分会  
雪晴の富士を遠見に傘を干す  
べうべうと梢巻く風霜日和

次回は令和五年三月二日(木)、  
兼題は春の季語「雛」一切(松田一文字さん出題)  
但し、「雛市」「雛流し」など別になっている季  
語、「雛唄栗」などは不舎。席題は西川知世さん  
出題の「入」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

現代の段飾りは江戸中期以降のことだそうであ  
る。本来は穢れを移したものを川に流す祓いの行  
事であったものと、季節とは関係なかった貴族の  
子女の雛遊びが結びつき、鑑賞に耐えるものへと  
変貌、代々受け継がれるものとなつたらしい。現  
代では大人たちが女の子の成長を願い開かれる宴  
が雛祭となつてきているそう。今は雛街道と名付  
けられた路があり、大家に伝わる雛段を拝見する  
ツアーもあるらしい。私は金沢に俳句仲間がいる  
ので、時々でかけるが、時期が合えば兼六園成巽  
閣で、加賀藩主前田家奥方たちの雛壇を拝見する  
のは楽しみのひとつ。例句を探していて、夜の句  
が多いことに少し驚いている。

潮引く力を闇に雛祭  
韓の血の絶えゆく家系雛飾る  
税申告済ませしゆとり雛飾る

正木ゆう子  
姜 琪東  
酒井絹代

雛祭る都はずれや桃の月

蕪村

裏店や箆筒の上の雛まつり

几董

美しきぬるき炬燵や雛の間

高浜虚子

更けまさる火かげやよひ雛の顔

芥川龍之介

雛の日や遅く暮れたる山の鐘

飯田蛇笏

月光は川原伝ひに雛の家

広瀬直人

雛祭る夜の静かに曇りをり

藤沢周平

雛段の緋にも疲るる齢かな

能村登四郎

雛飾りつゝふと命惜しきかな

星野立子

これはこれは貝雛の中混み合へる

大石悦子